國學院大學栃木短期大学
日本文化研究　第5号　抜刷
令和三年二月二十八日　発行

〈資料〉

折口信夫「発生日本文学史　室町文学史（上）」

（昭和四年・國學院大學大学部講義）

伊藤高雄編

〈資料〉

折口信夫「発生日本文学史　室町文学史（上）」

（昭和四年・國學院大學大学部講義）

伊藤高雄編

〔凡例〕

・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫（釈迢空）が大正末年から行なった講義・講演を、学生で門弟であり、昭和六年から八年まで助手を務めた小池元男氏が筆記したノートの一部である。

・資料の解題は、先に國學院大學栃木短期大学国文学会の『野州国文学』第八十六号（平成二十五年三月）の「小池元男ノート―折口信夫・郷土研究会ほか講義ノート―」、及び『國學院雑誌』第百十四巻第十号（平成二十五年十月号）の「折口信夫・國學院大學講義その他―小池元男・石上順ノート―」に報告しているので、そちらを参照していただきたい。

・本号に翻刻する資料は、そのノート番号46・47「発生日本文学史　室町文学史」（昭和四年・國學院大

學大学部講義　写真資料1）の一部である。本ノートの筆記は青池竹次によるものと本文中に注記がある。

・翻刻は、伊藤が行った後、武蔵野大学兼任講師の渡部修氏、國學院大學大学院生（当時）の郷田典子氏と読合せをし、最終的に伊藤が整理した。

・表記は原則として常用漢字とし、古典的仮名遣いとしたが、場合によって正字を用いたところもある。判読できない箇所は□で示した。

發生日本文學史　　折口信夫教授

昨年まで続け来れた私の講義は日本文学史が、文献時代に辿つたところで来てゐた。三年目に私は鎌倉時代文学史の講義をしやうと思つてゐたが、その時に野郎八郎の鎌倉時代文学の論が若されたり。それ以上の事をしてゐたが、惜しいと思ふ。今年は室町から江戸とを一続きに見て行くのがいいと思ふ。平安朝から室町まで、室町から後は平安朝の中間に入ることになると三つに分けられると思ふ。平安朝と鎌倉時代の間は世界を遠くしてゐるやうに思はれるが、あまり変化の変遷があまり一続きに見えない。三年目にあやまつてゐる文学史は平安朝までの話をしてゐた。毎年見せたものは段々と進めて行くのに、芸術的には海ゆかぬ、物は主としてもけれはあつたらしい。そのまが諸方に出きた。話しが出来る訳だと思ふ。これは五年前の人に対する。

物の講義は始めての人には眼で分かるが要点とつぶやいてあるが、その代時の物は強しあり、五年前の海の時は合はなくなつたと思ふ。

この学殺ひやつてゐる文学史で山崎甚吉氏の文学史は江戸時代も本の方であるし深く行て考られる。私が江戸時代をやつても別に鶴水合ひは出ないと思ふ。物の見方と一緒に見て行く積りである。今日のところは大よそこの共の四つ目のところをやつてさせて戴きます。

次のところ江戸の文学の中の俳諧は面白く面白しい。それは材料が豊富であるためである。文化が進歩に気れてゐる。そして文学者は陽気かきい。室町の人から京屋の若衆、風呂焚きまでが文学に合まれ、

発生日本文学史　室町時代文学史

昭和四学年度大学部講義　折口信夫教授

序説

（昭和四年）

昨年まで続けて来た私の講義は日本文学が、文献時代に這入つたところまで来てゐた。三年前に私は鎌倉時代文学史の講義をしやうと思つたが、その時に野村八郎さんの鎌倉時代文学新論が著された。それ以上の事を云はないと恥しいので止めた。今年は室町から江戸にかけて話して行く積りである。私の考へでは室町と江戸とを一続きに見て行くのがいゝと思ふ。平安朝から室町まで（一）と、室町から後と（二）、平安朝の前（三）と大きく分けると三つに分けられると思ふ。平安朝と鎌倉時代との間は世間では非常に違つてゐるやうに見てゐるが、私は文学者が共通であるから一続きに見度い。二年この方やつてゐる文学史は、平安朝までの話をしてゐた。私は其中には段々と変つて行くので、貴方々には済まないが、私は変らなければならないし、その方が諸君にも生きた話しが出来る訣だと思ふ。これは去年までの人にお詫びするのである。私の講義は始めての人には取つきが悪いといふ事であるが、その代り暗示だけは残しておき、卒業論文の暗示は含めて来たと思ふ。

この学校でやつてゐる文学史で山崎麓さんの文学史は江戸時代も末の方であるし、深く行つて居られるので、私が江戸時代までやつても別に触れ合ふ事はないと思ふ。私のはずつと一般に見て行く積りである。今日のところは大ざつぱな前置きのところだけをさせて頂きます。

実のところ江戸の文学史は日本の文学の中で一番むつかしい。それは材料が豊富すぎる為である。文化が非常に分れてゐる。そして文学者階級が多い。堂上の人から床屋の若い衆、風呂焚きまでが、その中に含まれ

てゐる。こんな人まで文学をするのかと思ふほど多い。丁度今ならば文学青年になつてゐるところである。ともかく江戸時代文学史の功労者をあげて置くと佐々政一（醒雪）博士がある。この人が江戸時代の文学を整理した最初の人であつた。今だにその文学史は価値が変らない。江戸の文学をやるならばあの本を見て頂きたい。博士の近世国文学史には「さうでげす」調があらはれてゐない。

江戸時代の文学史を作るのは難しいが、私はそれよりももつと難しい時代があると思ふ。それは室町時代である。この室町時代を研究したのは大きな声で云ふのは憚るけれども本当を云へば私である。威張る訣ではないが私です。威張るのだと思うては困る。私は威張る時には威張るのですから。

偖室町といふ時代は時代が転換した許りでなく、日本人の生活が変つた。つまり、平凡な言葉で云へば町人階級が頭をあげて来た。町人が社会の指導者となつて来た時代である。世間には然様でないと云う人がゐるが事実に於て然様である。文学なんか町人のものになつて来てゐる。芸術も然様である。一方考へて見ると、私どもの文学史に対する立場を世間では変てこなものだと思うてゐるやうであるが、どのみち私等のやつてゐるところを通つて来なければならないのである。

「文学史」の変遷　文学史も以前は書史的に、次に列伝体となり、芳賀博士以来は思想史の一つと考へてゐたが、思想史の一部分扱ひされて当時中学生であつた私は不平を感じてゐた。それがずつと続いて来てゐたが、二三年以来変化して来た。文学をば地方的に見て行く態度である。文学に地方性を認めるやり方である。或は文学の格式を見てゆくといふやり方、このやうな文学史のやり方が大分行はれて来た。

このやり方は日本では遅い。これは米国のもうるとんといふ文学史家の風を真似たので、もうるとんは又ふらんすの文学史家、又その人たちに影響した民俗学的態度をとり込んだのである。その文学史家の態度を模倣したので、もうるとんのは、ほんの出店である。この点では、私は負けません。

日本では民俗学をする人は少ない。然し私は民俗学を直接と取込んで文学史を見てゐる。之を少し威張つて云うたところがある人からぺちやんこにされた。ぺち

やんこにされても私は何とも思つてゐない。喧嘩するのが嫌だから黙してゐた。もうるとんの風を今更入れなくとも我々のやつてゐる方が進んでゐる。赤門大学派の人々が、このもうるとん派に属する。國學院の方がその点では進んでゐると思ふ。学校の誇りである。少し安心して進歩して行けると思ふ。赤門のやつてゐる態度ではもういけない。それは書物の解題であつた。文学史はそんなものではない。私は荒筋をやつて行くに過ぎないが、肉をつけ血を通はすやうに皆さんがしてくれゝばよい。卒業論文を見てゐると段々その様子が見える。

文学史に於ける室町時代の位置　ともかく然様いふ態度の文学史を我々仲間でやつてゐる。その態度から云うと、一番町民が指導者になつて来た室町文学が一番興味があるものとして我々を刺戟した。それで私どもが室町文学をやり出したのである。それは大分前の事だつた。それから世の中が自然に開かれてゐない室町時代に向つて注意を向けて来た。それは私の力でなく、世の中が自然さうなつて来たのであつて、私の力ではない。さういふ風で、室町に入り、少し自分にも変化が出来て来た。それを推して今までやつてゐた上代、平安朝をも一度やり直した。これが私の為になつたのである。之で文学史に対する私の態度が本当に定つた。まして江戸に引きつゞきが分つたので、縦に通した話がして見度い。

恐れるのは生命を中断するやうな態度でそんな風にはやつて行きたくない。室町幕府が出来たから今日から文学も伴つて変化するといつたような事はない。政治史上の時代によつて文学をはつきり分ける事はいけない。たゞ特殊なところの出来たところを中心にして、その前後を見て行きたい。それで室町文学史を話すのには、江戸をも云はなければならない。江戸を云ふのには、室町を云はなければならない。此の私の話は来年まで続くであらう。解決してゐない事も、その間にだんだん解決して行きたいと思ふ。

もう一つ申し上げたい事は予科と学部とは非常に違つてゐる。新入の人々は此処でうんと飛躍しなければならない。予科は学部の学風に這入るのに、準備を与へるだけに出来てゐない。学部の学風によく入つて頂きたい。難しいからと云ふて誰にもわかるやうな事を云

ふと、私が進まなくなる。私の学問が腐つては、貴方達の為にならない事になるからである。

しばらく、文学の本質問題に入る。

江戸時代の複雑と、室町時代の混沌　古い文学史を見ると室町時代は文学の上の闇黒時代だと称してゐる。これは説く者自身が何も知らない事を名のつてゐるもので、我々の文学芸術に限らず社会の凡てに通じて、いろ〳〵な複雑を含んでゐる時代はない。江戸時代の難しさと室町時代とは同じ位で、その上に例へて云ふと、この時代は夢から現実に入る時代であるから、文献が俄かに殖ゑて来てゐる。然様なると同時にその文献が物を解決するだけは揃つてゐない。ある様でもあり、ない様でもある。難しさが江戸と違ふ。も一つは江戸になると夫々の社会の生活状態、ひきくるめて夫々の階級の特色が人為的ではあるが定つて了つてゐる。それが室町では定つてゐない。歴史家に云はせれば決つてゐるといふが、それは逆推理である。道義科と国史科の人々の考へのいけないのは、神武天皇の大昔から日本人の考へは同じであると見る事である。今からは判らないが、同じではなかつた事は考へられる。江戸のちやんとした生活態度からは室町時代を見る事は出来ない。

作者階級と醞醸階級と　大体、文学を作る階級、或は文学を醞醸する階級を考へなければならない。文学を作らない階級は問題でないと云ふかも知れないが。文学を製作する階級（一）と文学を醞醸する階級と（二）、又別に文学に没交渉の階級（三）とがある。生活としては皆関係を持つてゐるのであるが。ところが江戸の文学になると、文学に対する無関心階級が殆んどない。無関心であるべき者が、どん〳〵やつてゐる。今の社会科学の様子が丁度これに似てゐる。江戸では文学に於て然様であつた。日本の文学の進まないのは、それがある為である。江戸と室町とは違ひがある。一番むつかしい階級から見ても、室町時代では、階級に対する見当のつけやうがない。どの階級が製作階級なのか、どの階級が醞醸階級なのか、どの階級が無関心階級なのか判らない。

室町時代文学史研究上の用意　私の文学史の態度は作家の階級の移つて行くところ、時代の推移の見当としてゐる。この醞醸階級といふものについて考へを深

くしてゆき、これを怠つてはならないと思ふ。これは今年あたりから気づいてゐる。室町は材料があるやうでもあり、ないやうでもある。一つの事を調べるのには足りないのである。しかもこれから何時何が出て来るか分らない。貴重な記録が一つ発見される毎に、学説が変ることが予想出来る。日本の文学全般に対して円満に読んでゐなければならない。これに慣れてゐると新材料の発見によつて学説をがらつと変へねばならないやうな目に合はないですむ。却つて助けられる事の方が多い。私にはその僥倖がある。出来るだけ本を読まなければならない。古典を重んじる風の学校であるからその心で本を読んで頂きたい。でなければ職人と同じ事になる。

一つの記録が出た為に変るやうな学説は立てゝおかないでほしい。私の講義も左様にうつかりした仮定を立てゝ置くと、豹変しなければならない。これは怖ろしいことである。これが又文学史家の室町時代を恐れた所で、江戸と難しさが違ふ。

室町時代文学の平凡性　室町時代はすぐれた文学のない時代で、すぐれた天才の出なかつた時代である。しかし沢山の風才が寄り集つて大きなものを作つた。日本の文学芸術の中で無名作家が、この時代ほど大きなものを作り出した時代はない。江戸の芭蕉・近松等は醞釀の助けはあるが、個人で立派なものを作つてゐる。室町は個性のない、しかし立派な文学である。世界の文学に対して日本の誇れるのは室町時代で、個性のない立派な文学を誇つてよいと思ふ。

室町文学の特質

五月三日

室町文学の特質を数へ立てると沢山ある。この前の話で漠然とそれを感じてゐるであらうが、沢山ある。一番はじめに私は文学者階級を考へて見なければならないと思ふ。

文学者として見た隠者階級　室町になると文学者階級が殖ゑて来る。といふのはつまり、文学の種類が殖ゑて来たからで、一つ事で律する事が出来なくなつて来た。その中で一つをとつて来ると、隠者階級と称すべきものがある。隠者階級は何時始まつてゐるかと云ふことは云へぬ事であるが、私の考へでは平安朝の末頃始まつて、鎌倉に色彩が濃くなり、室町になつて固

定して全盛となり、江戸に入つて元禄前後になくなつてゐる。江戸の文学で研究するのは、何といつても近松、西鶴、芭蕉であるが、これ等は隠者階級の人々である。その隠者階級も、江戸の為政者にとつて都合が悪かつたので、亡ぼされなければならなかつた。

日本の文壇で一番長く続いたのは女房文学とこの隠者文学との二つである。女房文学は日本の文学の発生時代からずつと文学が、文学らしくなつた時代まで続き、本当の文学としての生命は短い。隠者階級の文学は長い。この隠者階級の文学が亡びて後もその支配力が日本の文壇に来てゐる。それが明治に入つて翻訳文学にあつてがらつと転換した。翻訳文学が出なかつたならば、今だに隠者階級は続いてゐた筈である。近年五年ほど、又隠者階級の文学生活を省みる事が起つて来てゐる。文学の内容が段々変化して多種多様になつて然様したものをとつて見ようとするだけの事であるが。日本の文壇に於ける隠者の時代は長くその中心である室町時代の文壇を考へなければならない。室町時代の隠者階級の文学の特質を分解して見ねばならぬ。鎌倉から室町へ（一）、室町から江戸への隠者（二）、と、更に江戸の隠者（三）との三者の違ひが、同じ隠者といつてもどうしても出て来ると思ふ。この特質は、口頭文学からすつかり独立してゐることで、室町時代の文学の一つの特質は、この口頭文学が文献文学へ移つたといふところにもある。――勿論文献文学は昔からあつた――つまり文献を持たぬものは、文学ではなくなつた。その原動力となつたものが隠者である。隠者の生活、文学に凡てがならつて来た。といふ事は隠者がこの時代に一番勢力を持つてゐた事になる。

隠者階級の三変遷　隠者はだん〳〵変つてゐる。隠者の定義は古いところでは三通りおかねばならぬと思ふ。一番隠者の隠者たるところは鴨長明のやうな生活法をとつた人達で、これが隠者といふ考への一番中心である。坊さんでもなく、半俗半僧の生活をして、半分慾望をもつて生活してゐる。かういふ隠者で、一番大事な事は従来の宗教家はすべて遊戯を廃するところに戒律を守る意義があつた。それが、この隠者は特殊なものは僧でも弄んでもよい事となつてゐる。特に芸術的の事はよい事として許されてゐる。之は古くは僧籍にあるものには許されなかつた。仏教では、「狂言

綺語戒」と云うてゐる。それが平安朝中頃以来、文学音楽等の芸術は支那の六芸と一つになつて同視するに至つた。そして文芸を僧侶の戒律以外に置く事となつた。「狂言綺語戒」とは云ひ乍ら、傍ら文学・音楽等繁雑なもの以外は、取込んでいゝ事になつた。それを先づ隠者が芸術方面にそゝぐ事になつた。その点、隠者階級といふものが従来の坊さんと違ふところである。鴨長明を見ても兼好法師を見ても皆隠者で、名前は法師でも生活は隠者生活をした。この隠者といふのは生活の方法からして云ふのである。

兼好法師は徒然草でしきりに文学芸術を論じてゐる。——徒然草の注釈では内海月杖さんのものがよい。氏の著述の中で、この徒然草の研究が一番すぐれてゐる。語句の解釈では未だしと思ふものがあるが、味はふてゐる点では、他の物よりずつと勝れてゐる。——或は延びて来て社会人事の間に起つて来る趣味、一種の遊離した芸術から見た人生といふものを無条件で取り入れてゐる。——芸術と生活とを一緒にしようとしてゐるから今から見れば駄目であるが……前代の自然主義の文学で、一番云うてゐた事は作中の人物そのものゝ心持を出さなければならないと云ふ事であつた。その烈しい主張者の一人が岩野泡鳴であつた。私がその時代時代の事をよく云うたからとて私が然様であると思うて貰つては困る。然様見られては話が出来ない。私の意見は又別である。私は時代を出来るだけ助け、いたはつて話してゐるのである。

兼好は極端に変な人であるが、その先達と思はれる人は、鴨長明である。長明作と云はれてゐる方丈記は一時長明の作かどうか疑問とされた。山田孝雄氏の研究の結果、今では再び鴨長明の作であるといふ事になつた。何れにしても方丈記は古いもので、長明の作でないとしても、長明といふ人に託して、あの様な生活をした者が、隠者の先達だと見られる訣である。隠者の理想とするところのものが方丈記を見ればよく判る。これまでの僧坊生活では許されないもの、たとへ為てゐたとしても、こつそり秘密にしてゐた生活が、つまり楽器を弄び、書物——文学書に慰む事が許されてゐる。客観的なら今まで許されなかつたものも、かまはないといふ考へが出て来た。そんな生活の源を観るとまだある。

平安朝の末になると源が二つある。一つは僧籍を持ちながら寺を離れて芸術に関係してゐるもの。つまり本当の僧侶ではないもの。他の一つは、隠居である。世間の生活から離れて隠居し乍ら芸術に関係してゐる人、時々召されたり、参つたりして宮廷や貴族の家に立ち入つてゐる人々である。この二つが混合して鎌倉時代の隠者になつて来てゐる。つまり総括すると、三通りある訣である。即ち、僧侶であつて、寺から離れて芸術にたづさはつてゐる人（一）、公卿殿上人であつた本職を捨てた後に文学芸術によつて宮廷貴族の家に立ち交じつてゐる人（二）、及び（一）（二）を併せて隠居してゐる俗人の隠者生活（三）の三者である。長明の先輩と云うべき、俊慧法師は、歌道の師範家から出てゐる。師範家は平安朝の末から成立してゐる。この人は寺に生活しないで、庵を作り、静かに友人を集めて歌の会をしてゐる。これが書物に見える隠者らしい生活のはじめである。文書に見えてゐるのがはじめであるから、この人を一番古いとするのはいけない。書物に出るまでには、記されない、それ以前の型があつたからである。文書に表れた最初の人をもつてはじまつたとする訣にはゆかない。古い人とするのはいいが、最初と定めて了ふことはいけない。

俊慧法師に少しおくれて西行法師がゐる。西行は寺に附属してゐない。寺にあちこち寄宿することの出来る身分で、諸国を巡つてゐた。西行は歌許り作つてゐたのか、他に何か職業を持つてゐたかはすぐに断定する事はできない。西行が諸国を巡つたのに就いては何か訣があらう。普通に考へられてゐる外に何か訣があると思ふ。

貴族に交はる二階級　西行法師は僧侶だが、隠者の俊慧系統の一人である。俊慧は歌道の人であるからきつぱり判るが、西行でも歌集を見るとよく判る。西行は人に招かれてゐる許りでなく自分の家にも人を集めたらしい形蹟がある。又家でなくても人と集つて歌を作つてゐた事は判る。では、何故に僧侶が然様な事をするのか。之は逆に考へる。即ち、そのやうな生活をするのには坊さんになるのがよいと云ふ形があつて、坊さんだから行ふといふ風になつて来たものと思ふ。世の中の階級は、越えられぬものである。ところが昔から階級を越えられるものがある。それは僧侶と芸術

家とである。僧侶は時によつては天子のところまで行ける。そこで自由である。時にはまた公卿達でも僧侶の配下になる事がある。例へば寺の奴隷に童子――髪を襟のところで切つてゐる――といふものがある。法会の時には公卿でも堂童子といふて僧侶の下で働く。堂といふ文字をつけるのは、殿上、堂上の人がなるからだと思はれる。だから僧侶はある点ではある時には階級感から取りのけられる。

昔の芸術家は大抵奴隷であつた。平安朝の中頃から奴隷の扱つてゐた芸術は次第に堂上の公卿殿上人等が自身でもするやうになつて来た。それから次第に正式なものから乱れたものになる。公卿らの持つてゐた高尚な芸術、漢才――此は主に学問と芸術の事で、六芸の事をいふてゐるやうである。――に、奴隷の芸術を取り込んで来た。これが平安朝中頃の特質である。それが平安朝の末に続いてゐる。芸術階級は奴隷階級であつた。芸術と云うたところで今の様に勝れたものではない。その芸術階級のものは芸術を以て公卿に接することが出来た。或は又容色を以て接近する事が出来た。そこで両者が離れられない関係になつた。社会的に云へば奴隷は卑しいが、芸術・容色の問題になると、公家と結びつくのに非常に自由で、恐るべき程接近してゐる。大江匡房の新猿楽記を見ても判る。殿上人と接触して結婚までしてゐる。歴史記録を見ても、ある事は事実である。僧である、芸術家であるといふことが貴族に接するに容易なのであつて、かくなる元はもつと古いところにある。貴族に近づくには僧になるのがよいといふ事が、やがて僧侶だから貴族に近づけるといふ様になつた。身分の低いもので貴族に近づけるものは大抵僧侶か芸術家であつた。貴族に近づける者に武士があるではないかと反問されるかもしれないが、武士の中で貴族・宮廷に仕へてゐるものは大抵芸をしてゐる。即ち六衛府の武士や瀧口や北面の武士は神楽を舞つたのである。それから又歌を作る。その歌を発表する時だけは貴族の許へ行けた。平安朝の末になると、世の中が一そ僧侶となつて了へと云ふ風になる。西行はその目につく一番最初の人であつた。西行が、いまだ佐藤義清とて院の北面の武士であつた時に明日逢ふ事を約束した人の許へ翌日訪ねて行くと既に死んでゐた。それを聞いて逆に出家遁世したと云はれてゐ

る。その動機もあるいは事実であらう。しかしこれは鎌倉時代の西行発心物語といふ様にして伝つたのである。西行が僧になつた動機は貴族にもつと近づかうとする意識があるに違ひないと思ふ。宮廷貴族に仕へてゐた武士はかくの如く大抵僧になつて行つたやうである。後の藤原秀能――平安朝と鎌倉とのつなぎの時期の人――が、□となつたのも然様で、常住に行けるやうにさうなつたものと見なければならない。そして僧であり、芸術をもつてゐるといふ事が、貴族に近づき、密接な関係を結んで行けるといふのである。だから隠者の出来て来る事は当然で、俊慧も西行も然様である。長明亦然り。――長明は文章よりも和歌の方がいゝ。動機は賀茂神社の社司を願つて叶へられなかつたので、隠者になつたといはれてゐるが、その文章は時代の先駆として文学史の上では、一寸注意に値するものがある。歌にはいゝのがある。瞬間的にいゝのは長続きはしない。芸術といつても要するに人格の表れである。短い時間では劣つた人でも人間性を拡張すると英雄にも偉人にもなれるが、長続きはしない。芸人もびつくりする程のものを持つてゐる事がある。しかしさうした芸人等は、人格といふ点では賤しいものが多い。それ故に勝れた作品を持つてゐるからと云うて、直に其人格をも立派なものと決めて了ふ訣にはゆかないのである。短いものによい作物を出す人でも長いものを書くと変つて来るものである。

隠者階級としての長明の生活が出て来た。それは社司になれなかつた腹癒せであつて、隠者になつたら貴族に近づけるものと思ふてゐる。（西行だとて然様であらうが、もう今では偶像になつてゐる。だからそれを打ち壊して言ふのも悪いから余りいぢめないが、それは見る者の情けである）

も一つ貴族とは云へず、然うかと云うて地下の階級でもない殿上人といふ様な階級の人は、やはり僧になつて、自分の名誉、社会的地位を継ぐものがある。つまり職つなぎで、為のこした仕事、地位のつながりの為に僧になる。そして貴族に召されたり参上したりする。定家の父俊成がさうである。

俊成は平安朝の末の文学の総元締めのやうな人である。職を止めて了へば、それきりであるが、僧になつて自分の地位を継いでゐる。そして九十賀をするまで

貴族の許に出入してゐた。つまり殿上人といふ階級で、しかも貴族とも言へぬ階級の人達で、芸術或は学問をやつてゐる者が、職つなぎに僧になつて行く。其も隠者の一つの形である。

隠者の導きには以上の二つがある。その二つが本当の隠者とも云ふべき第三の隠者に到達する。隠者は略、鎌倉時代になると完成してゐる。その隠者の生活の誇張記録といふものが、残つてゐると、それを読む人がまた誇張して考へる。空想が這入つて来る。我々が長明を見るにしても、江戸時代の考へを取り込んで考へ、それに又今の文学者の見方をも取り入れてゐるが如きである。

われ〳〵の考へてゐる隠者は、鎌倉のはじめに大体出来てゐる。その生活は修道生活を本職としてゐるのではなく、修道は表である。だから嫁さんを持つてゐるのもある。主として芸術で世渡りしてゐる。ともかく生活法に一つの制約がある。簡素な生活をすることである。慾望を極端に伸ばしてゆく人ではないと見られなければならない生活をする。そして一方文学・芸術をつとめてゆく。それによつて、隠者の種類が違つてゐる。だから静素な生活をしなければならなくなつてゐる。西行などは必ずしも静かな生活ではないが、一般には静かなものを与へなければならないので、その人等の扱ふ芸術にも違ひがあつたのである。

擁護者階級の推移　其人達が保護者の階級を変へて来る。文壇を考へるには、醞醸階級を考へなければならない事は前に述べたが、別にぱとろんの階級・擁護階級がある。所謂旦那といふものを傍に考へなければならない。――この旦那といふのは坪内氏がぱとろんを訳出した語である。坪内氏は森鷗外に較べるとどうも品格が下るが訳語には苦心した人で、この旦那といふ詞などはよい訳である。――その擁護階級が変つて行く。隠者は小判鮫の様な文学者である。隠者は擁護階級を持つてゐるのである。この擁護者が如何なるものであるか、たゞして行かねばならぬ。つまり隠者階級の目につく出発点は歌で、歌道の師範家といふのが、小判鮫の立場であつた。隠者といふ小判鮫は大抵ぱとろんの財産に附着してゐる。天皇が譲位になると後院が定められる。それに名がつく。之は兄弟の関係ばかりでなく、後院にお引き込みになると、この後院と関

係を結びつけて行くやうになつたのが、平安朝末の歌道の師範家で、これは南北朝にもあつた。南北朝になつた大覚寺派、持明院派が然様である。二条家は持明院派、冷泉家は大覚寺派であつて、財産が大体目当であつた。ともかく然様にして進んで来てゐる。

抑々隠者の目のつく初めは、歌道にあつた。で皇族の財産継承関係から一種の系統が続いてゐる。貴族の方ははつきり判つてゐないが、やはり然様であつたと思ふ。それが鎌倉時代になると従来の貴族以外に新しい貴族、即ち武家階級が出来た。かう云ふと平安朝にあつても平家は武家であつたではないかと言ふかも知れないが、平家は武家ではない。公家と同じである。社会的にも、自覚的にも公家であつた。平家の時代にあつて平家の擁護したものは文学より寧ろ音楽舞踊つまり演劇的方面であつた。そこに平家の力があると思ふ。そこから平家物語などが出て来る。平家には大きな小判鮫がついてゐる。少納言信西がある。その下に又各地の芸術家がついてゐる。

武家をぱとろんとする隠者　ところが、鎌倉になると、武家の階級が貴族になりたがつて来た。源氏は実朝以後貴族になつて了つた。貴族になつてはいけないと言ふことが、鎌倉になる前からありながら、誘惑されて了つたのである。貴族になることが一つの誘惑であつた。そして反対の勢力が動いて、実朝はつひ殺された。武家には貴族になるのが痛手であり、誘惑でもあつた。その武家にも、小判鮫がゐる。定家などである。定家は実朝に萬葉集を贈るし、実朝の歌を見てもゐる。勅撰集のうち、第九代目の新勅撰集は宇治川集と名付けられた。これは源氏や源氏輩下の者の歌が多数ある。昔の武家は宮廷直属の武家であれば優美な舞をする為の武家で、歌をよむ者であつた。それが、鎌倉以後の武家は、田舎武士の階級がなり上つて来たので、今までの武家とは違ふのである。そんな階級の武家の歌が勅撰集に沢山陳列せられたので宇治川集と云はれた。それには訣がある。

　　ものゝふの八十宇治川の網代木に
　　いさよふ波の行くへ知らずも

といふ人麿の歌がある。勅撰集に武士の歌が多い事を悪口したのである。後拾遺集が出た時にも悪口が出た。津守国基が撰者通俊のところへ小鰺を持つて行つたの

で、歌を沢山入れて貰つたのだとて、その集を小鯵集とあだ名した。「江戸の川柳作者よりも下劣なもの」つまり宇治川集と悪口されるほど、新しい擁護者階級として、武家を見出して行つたのである。定家は隠者階級のものとしては、取扱ひにくいが、定家は色合ひのはつきりしたふてぶてしい人である。この人は人格的に傷のあつた人らしい。明月記を見ても、抗議を申し込むのを常習としてゐるやうな人である。後の噂であるが、彼の日記明月記にはこよりでとじてあつて決して発表しない部分があつた。定家の没後或時、為家ではなかつたが、為氏の兄弟だつたかゞ理由なくして島流しになつた。それは今まで明月記の隠してゐた部分を見ると、定家が才能のあつた後京極摂政良経を妬んで、邪魔者として良経の家の天井にひそんでゐて殺して了つた事を記してあつた。その為に子孫が流罪にあつたのだといふ。歴史の上でも良経は誰かに殺害せられた事になつてゐる。一方に歌の神様の様に云はれ乍ら他方にそんな噂のある人で、人格的に見てよい人ではなかつた。しかし芸術的にはいゝ歌のある人である。其の定家は宮廷にもぱとろんをとり、新興の武家にも擁護者を持つてゐた。だから公家にも持つてゐたであらう。沢山の擁護者を持つてゐる事がこれまでの歌道の師範家を圧倒して定家の下にして了つたのである。そして唯二条・冷泉二家として了ふことが出来たのである。

定家は隠者の形をとらなかつたが、隠者階級の生活をしないでも、同じ目的に向つてゐた。それといふのも隠者階級の生活法が鎌倉の初めに完成したとも云へるからである。つまり似て別のものが出来てゐると説明出来る。

家元制度

五月十日

前回の話を進めてゆく。今日の話は文学の範囲が広がつて行つたといふ話になる。前回は定家卿の話で終つた。鎌倉以後ずつと続いてこれまで形式的になかつたもので、江戸になつて著しくなつたのは、家元制度である。これに眼をつけるのが文学史及び芸術史の視点である。文学史に於てもそれを或見方としてやつて行かなければならない。

江戸の文学芸術に於てその発達してゐる方面のものは

家元を離れては殆どない。定家卿といふ人は人格はあんな人であつたが、つまり隠者態度と家元制度を一つにした人であつた。まづ平安朝の末から家元制度の起因はあつたけれども、其が著しく見えて来た、その代表者を出して置くのである。私の文学史では時と人とをもつて事のはじめとすることは出来るだけ避けたいと思ふ。たゞ代表者を挙げておく事は話を進めていくのに都合がいいからである。例へば安徳天皇が海に沈まれたからとて、その次から直ちに時代が変つたとする様な事は到底できない。定家が文学に於てさうした為に、逆に遡つて凡ての芸術――平安朝から続いてゐる芸術が家元制度で組織せられて来た。実のところ平安朝は家元制度はなかつたが、今から見るとあつた様に見える。定家のやうな人が出て然様いふ態度をとつたので、凡ての芸術が見慣つた。そして逆にさういふ組織を作つて来た。其には一つの原因がある。

定家の順応性　定家は人間としていやな奴――奴といふに当る奴であるが、環境に順応して行く事に長けてゐた。良い意味でも悪い意味でも順応して行く丈の力があつた。とにかく定家が一人で撰した新勅撰集が宇治川集と言はれたやうに、武士階級と言ふものを認めてゐた。其は定家一人でなく社会全体が認めて来たのである。其に此を無視しやうとする連中が、京都の公家にあつて、承久の乱を起し其からごちや〳〵してからすつかり形を変へて後醍醐天皇と北条氏との争ひとなつたのである。定家卿の青蛙やかめれおんの様に環境に順応して行く態度が、武士階級の生活態度をよく取り込んだのである。

武士の方は平安朝から既に然様であるが、自分等の家の系図を飾る――かう言ふ家筋だと自分等の家の代々の人々を組織立てたものを作らうとする慾望に燃えてゐた。其一つの表れは、武士の家の系図ひとつは高名録、つまり自分の家の歴史を書き立てる、沢山居つた人に一種の組織を立てること、（一）、或る時代のある人の非常な武勇をば、それをば上司に見せる（二）、といふ二つの形をとつてゐる。其高名録が次第に文学を生んで来る。此処でも一つ申し添へて置かなければならない事は、私の文学史の態度で、高名録は唯一つの原因から起つて来たとは云ひたくない。又、言へないと言ふ事である。将来する原因の本筋となるものも

あるが、又脇筋もある。高名録から文学が出来たと言ふ事は本筋で、外に脇筋がある。例へば、保元、平治、平家物語、源平盛衰記等と云ふものの起るもとは、上司に奉つた高名録の変化して他の芸術の援け、例へば琵琶にかけられるとか、語りものになるとかを得て、文学になつて来た。然様したものにはすべて平安朝の武家の家に対する一種の歴史態度が表はれてゐる。本当の事も述べられてゐようが、大抵は嘘であらう。其が次第に発達して室町時代になつて系図をやかましく言ふやうになつた。系図をやかましく言ふ事はもつと昔からであつた。酢と薑売りが争ひに系図を述べる。炮烙屋が喧嘩をすると言ふた様に室町時代の狂言の中には、系図争ひを主題としてゐるものが沢山ある。其も一つの分化である。江戸の文学でもやはり同じで、系図の言ひ立てをする。歌舞妓になると言ひ立てがある。其も皆系図である。其の間に色々なものが這入つて来る。「助六」でも外郎売りが系図の云ひ立てをする。早口文句が面白かつたのであるが、之は歌舞妓十八番にある。歌舞妓は何でもかんでもする。今は大抵、早口をいふものが無くなつたので、一寸言ふて後は踊りでごまかしてゐる。又云ひ立ての芸術的になつたものをつらねといふ。つらねせりふと言ふので歌舞妓十八番中の「しばらく」が然様で、花道七三のところで言ふ。系図ではないが、同じ系統のものである。

然様な風に日本の芸術には殊に系図を重んずる傾向が、平安朝末からそろそろ出て来て鎌倉に発達して室町で完成し、江戸で転化して来てゐる。

定家卿といふ人は武家の其の態度をよくのみ込んで、其の生活態度を自分のものにした。だから定家が、芸術に於ける家元のはじまりと言ふべき人である。武家は既に行つてゐたのであるが流れは然様になつてゐる。

家元制度の発達　定家が然様な事を案出した為に歌道の師範家が鎌倉から確立して来た。実のところ平安の末であると申して来た。其形を遡つて琵琶は謡からはじまつた。笙の笛は謡からはじまつた。箏は謡にはじまつて謡が完成した等と云ひ出したのである。此は鎌倉から遡つてゐる。鎌倉には音楽書が沢山ある。家元制度の発明者は定家であり、其の一番最初のものは歌である。此の定家の発明した家元制度は次第に連歌

の家元、俳諧の家元、江戸になると川柳の家元、広義では川柳をも含めた雑俳の家元に発達して行く。然様な訣であるから平安朝の末に既に師範家は有り乍ら鎌倉からはじまつたと考へられた。ところが。其中特殊な文学が又出て来た。長い歴史を申すと日本文学の発生から言はねばならないが、平安朝の文献に現れてゐるものでも奈良朝にあり著しく見えてゐるのが、平安朝も百年経た頃で、連歌誹諧があつた。（誹俳両方とも用ゐてゐる。江戸の一番最後に出ていゝところを採つて単純にして来たものに歌沢がある。この歌沢にも歌と哥と二通りの用法があつて、系図を云ひ立てゝ誹俳同様に争ふてゐる）

斯うしたものが、平安朝も百年頃になると段々発達して来た。形式も表現法も変化してゐるが、ともかく長い歴史をもつて来た。連歌といふものは坊主の芸である。此には長い原因がある。本当は坊主の芸で、連歌誹諧のはじめは僧にあると思ふ。坊さん等の連歌誹諧の態度が進んで来て隠者になつた。隠者を三分して前述したが、三つとも歌と共に連歌・誹諧をもつてゐる。此処で言はなければならない事は、私が、民族や民俗芸術に属て書いたところであるが、日本の文学芸術は真面目な芸があると其を翻訳する芸が有る。本当の真面目な芸は難しくて解らない。其は神のものであるからで、今様に翻訳して見せる。其が時代と生活の分れる根本の事である。時代のものを分けて王代もの、家ものと分けて来た。とにかく神のもので分らぬものを今の言葉、表出で示す為の芸が起つて来る。即ち副演出といふ事が行はれる。象徴的なものをくだいて分るやうに今様にする。其の副演出が非常に殖ゑて来る。殊に芸能演劇的の方面に多い。連歌誹諧といふものも実のところ元の出発点は短歌に対して発達して来た。或は短歌より古いと思うてゐるのであるが、短歌を本流の芸術と見た為に短歌の翻訳芸術と言ふ形で使うてゐた。

副演出がもつ滑稽味　日本の副演出は条件的に滑稽といふ事が伴つてゐる。滑稽或は皮肉の方面が条件的にくつゝいて来る。此も理由はあるが、こゝでは述べない。

連歌、俳諧の出発はある古い時代から和歌と一緒にやつて来た。和歌が本筋のもので、其には階段があつた。

一、和歌（短歌）
二、誹諧連歌

順序から云へば誹諧の方が先であるが、後の文学に世間が価値をつけたのは連歌。だから此処は一緒にしておく。

斯う言ふ風になつて来る。誹諧は滑稽・皮肉にゆき、連歌の方は和歌の間の延びた様な芸術になつてゐる。其をば寺で扱つてゐる。殊に連歌の方は主として寺の芸であつた。寺計りでないのであるが、其が三種類の隠者の中に這入つて来た。何故かと言ふと、文学を観賞し、味はふ階級が変つて来た。其までは公家であつたのが、鎌倉になると武家が観賞階級となつた。同時に醞醸階級ともなり、正式には見られないが、作者の階級にもなつた。だから自然嗜みらしいところが出て来て、和歌は公家のものだ、武家のものは連歌誹諧を事とするといふ風になつて来る。分かり易く手取り早く言ふと此までの隠者階級のものが、公家には歌を、武家には連歌誹諧を師範する事となつた。これは比較的に言ふたので勿論公家に連歌誹諧を、武家に歌を師範する事もあつたのである。

平安朝の末から鎌倉の初期にかけて変てこな時代で、われ〳〵の国の歴史の上で、室町時代と平安朝の末とが、一番興味のある時代で、若い学者の本当に働ける時代である。平安朝の末は公家が地下の生活を学んでゐる時である。例へば、白河院が丹後局をめとられた時初夜わざ〳〵局のところへ行つた。男が女のところへ行くのは民間にあつた風で地下では婿入りをする。民間の演劇・舞踊に対して貴族・皇族が近づいて来て其と同じ様な生活をする。好意のもてる時代である。然様した平安朝末の状態に引き続いた鎌倉時代で、（自然の過渡期を考への中に入れて置かねばならない。）其の頃丁度よく後鳥羽院が出た。芸術に勝れてゐて、其の前後の天子にはこの御方程すぐれた方はゐなかつた。其の代り後鳥羽院は非常に自由過ぎるところがある。其様な方であるから民間の芸術をうんと取込んでゐる。新古今集を見ても分る事である。民謡の味が堂々たる勅撰集に出てゐる。其以外にも民間の芸術を取り入れられてそれ〴〵に達して居られる。うかれめに皇子を生ませてゐられる。さういふ乱雑な成金的な無茶

苦茶な時代に文学芸術は飛躍する。さうした時代には根本に飛躍する力をもつてゐる。後鳥羽院が其典型的な方であつた。時代にも又其の風があつた。

連歌の学問化　連歌誹諧が武家の階級は勿論、公家の階級にも発達して来た。和歌と学問は同じ価値を持つて来てゐた。歌は当時学問と見られてゐた。其中連歌誹諧が芸術的に扱はれて武家は連歌を主として其くだけた芸として誹諧をする。故に和歌の副演出が、連歌となり、連歌の副演出が、誹諧となる。其を公家もする様になつた。

連歌は鎌倉のはじめに既に文学としての扱ひを受けてゐる。が、歴史があるから文学だと云はなかつた。少くとも文学である為には、学問でなければならなかつた。連歌には学問の基礎が無かつた。だから文学とならなかつたのが、次第に時を経て、連歌が学問の基礎をもつて来るやうになつて来たのが、室町時代である。其は所謂室町より少し早く南北朝時代である。和歌を作る人の他に連歌を専門とする人が出て来る。矢張り隠者である。連歌が文学となつたのは菟玖波集による。この本が連歌が世に文学として認められた最初で、認めさせる努力が成功して準勅撰集となつた。

五月十七日

新興文学　江戸から今まで残つてゐる家元制度の起元とも云ふ話をして其が歌道の師範家から出てゐると云ふこと、更に連歌誹諧の話をして置いた。

今日の話は細論に入る順路として口頭の文学と書物の文学との交錯してひとつの自由な文学を作り出したこと、其中心が室町にあること、その為事が本当に完成したのは江戸時代であるといふ事の概略を述べる。

普通の文学史によつても鎌倉時代は新しい文章が起つて来た時代だと言はれてゐる。階級的に言ふと、武家の文学が興つて来た時代だといふ。武家の文学と云ふべきもの即ち軍記物が熾んに興つた時代だと言はれてゐる。これはもつと内面的に這入つて見なければならない。普通云ふ和漢混淆文が出来たと云ふ方が、もつと適切である。その和漢混淆文の出来たのは必ずしも武家にはじまつた事ではない。其が武家の高名録から出てゐるのは本当で、其を育て、来たのは隠者階級で、之が働いて一方では隠者階級特有の文学を生み出して

ゐる。戦記文学以外に隠者文学は豊富にある。そしてそれ等を通じて見る事は、女流発想法から開放された自由な文学、女流の発想法の物語文の中に、男の自由な表現と新しい外国文の発想法を入れて来た事がすべての隠者階級の文学に現れてゐるのが特徴である。それは日本固有の発想法を□すべきものではない。鎌倉室町の文学に条件をつけて置かなければならない事は、過去にそんな事があつたかと云ふ事で、然様な事は奈良朝にあつた。漢学者が従来の口頭の文章の文脈にすがり乍らその文章に新しい表現法を加へた。（この表現法は主に形式の方面で、発想法は形式内容分れぬものをいふ）其がよほど下手に現はれたのは、変なものになつてゐるが、後世になると、其が一寸わからぬ。ともかく表現法発想法に大分妥協がある。

室町鎌倉に現はれた文学の発想法は自分等の自由な発想法を出す為に従来の女流のものでは満足しきれなかつた。第一に生活が違うてゐる。其で変つた外国文（人）の翻訳くさいものを加へて来た。其を普通世間では和漢混淆文だと言ふてゐるが、単純に律する事の出来ないものである。

此新しい日本の自由文には段階がある。男性的であつて、書いてある人物、語彙が、武家の生活に近いものがある。此が軍記物・戦記物である。

其の外なほ純粋の隠者が隠者として筆をとつたもので（其と言ふのは軍記物・戦記物は隠者が頼まれて書いたもので妥協して書いてゐる）。隠者が自由な気持ちを出してゐる文学がある。抄物の種類の文学である。かういふ文学の一流があるが、その中に又物語派のものと漢文脈の多いものと二つになつてゐる。新しい言葉の刺戟を受けた東語等である。東語彙・発想法を取り入れたのである。かうしたものを排斥する事なしに何でも取り込んだのは、平安朝の終りから鎌倉にかけての事で、公家から武家に移つた根本の訣である。だから東人の語の影響を受けてゐるが、外国文章の影響も受けてゐる。此は同じ事である。帰化僧・留学の僧の使ふ詞が、又新しい刺戟を与へる。世の中は詞の刺戟に飢えてゐる。殊に武家の時代の始めの特色として方言或は外国語の語感（言語情調）を好んで受け入れた。為に世の中の言葉が変つて来た。言葉の変化するにつれて世の中の情調が、次第に変化して行く。其処

に時代の旋回した事が文学を通して現れて来る。世の中はまづ詞から変へられて来てゐる。

抄物　抄物には物語系統を引いたものと漢文（内典・外典）的発想法を用ゐたものと二通りある。其の外にも一つある。即ち日記体の文学である。

日記体の文学は別に一項設けて話さなければならないが、物語風の日記もある。本当の書記官の書いた日記もある。平安朝の日記と言はれるものは、物語と同じで、武家になつてからの日記は書記官の書いた日録で、鎌倉のはじめの頃のもので見ると、抄物文学と殆んど同じ形のものである。

物語系統
内外典系統
日録系統

この三者が抄物系統に這入つて来る。隠者にすべてある日録系の文学と言ふものは、鎌倉時代の文学の根幹と考へてゐる。東鑑風の和漢混淆体で何年何月何日に何があつたと言ふ風に叙述して行くもので、一見漢文らしいが本当は漢文の顛倒の規約にすがり乍ら書いた日本文である。かゝる物が出て来ると又変つた筆記物が、出て来る。此が一番大切な文学である。が併し此は極く一部分だと思ふ。

抄物といふものは何であるかと言ふと、其の意味は時代によつて変つてゐて一口には言へない。抄とは抄き書きで、読書の際必要と思ふところを書き抜いておく。そして其を貼附して置く。其が纏められて抄物となる。近世――室町時代以後江戸時代にかけての抄物の特質は主として注釈ものと言ふ感じになつてゐる。仏教の方でも、漢文の方でも、日本文の側でも注釈物の意味に見てゐる。（本来の意は抄き書きを巻物へ貼り付けて行くのであつた）。これが抄物の本体だと思ふ。抄物の上には或書物、本の上にづた〳〵つけて行く系統が延びて行くと、其事について出て来る外の事実を参考に貼り付けておく。其が注釈書といふ形になる。源氏物語湖月抄、枕草子春曙抄等と云ふ風に注釈書を抄と云ふ訣で、其は寺家の方に多く見られるやうである。ところが以前は文学と文学で無いものと芸術と色々の話が混じる。然様なのは、書物に貼り付けて行く方であるが、巻物に貼り付けて行く系統は、貼り付けて行くといふ事が段々昔からある。絵巻物と一緒

になつて絵と交互に書き混じへて行く様になつた。鎌倉時代のはじめから室町時代のはじめへかけての抄物の特質は、絵巻物系統のものだと考へる。少くとも絵巻物の形と妥協した形である。古いものを見ると事件と絵とが並行してゐる。後には文句と絵とが交互に書かれるやうになつて行く。ところが絵巻物の中の一流をなす寺家系統の絵巻物では不思議なものがある。例へば、因果経絵巻と言ふものが、奈良朝にある。上に絵があり、下に経文がある。ところで平安朝では判らないが、室町時代になると、同じ絵巻で絵巻の中に色紙を加へて行く、其に経文を書いて行く。其貼附した紙が所謂色紙のもとだと思はれる。私は因果経絵巻の流れがかく変化して来たのだと思うてゐたが、其考へは変へねばならない時に逢着した。私は絵巻物の上に抄物が、這入つてゐるのだと見る。中には絵が無くなつて文句許りのものもある。併乍ら現存する書物から類推して逆に昔はかうだつたと決定する事は絶対にいけない。源氏物語も然様で、後になると、とうてい絵が画けないので、文句許り書く。宇津保物語でも文句は別で、其終りに其をかいつまんだ様な文句が載つてゐる。其は絵の説明であつたのが絵のみ脱落して、文句が残つたと考へなければならない。（宇津保物語は鎌倉時代のもの）。

隠者階級は芸術階級であるから昔の物語を写すにも、絵を書いたであらうが、段々絵を習ふ事が家庭教育から遠ざかつて字許り書くやうになる。今存つてゐるものに絵が無いからと言ふて昔も絵が無かつたのだとは言へぬ。其絵についてゐる紙は抄物の発達したものと思はれる。宇津保物語になると、抄物が二つ重なつてゐるのである。抄物の中の物語系統のものは事実を主とした教訓的のもの、類話を集めてゐる。事実だと信じた類話を書いて絵を画いてゐる。つまり絵と話が交錯して続くのである。絵と物語とが、断片的にならないと調和出来ない。之が後に絵が先にあつて其に説明をつけ、又其後に絵を画き、説明をつけると云ふ傾向となつて来たのだと思ふ。併乍ら之は、話が断片的であつた。其が絵の手数を省いて、物語だけ書く事になる。之はあまり遡らないでおいても、鎌倉時代や室町時代にはじまつた事ではない。然様な教訓的類話集は元は、物語が絵詞として発達したので、絵詞風の現は

し方をとつて来る。抄物としては、一番物語風にやはらかであるからである。然し新しい語彙が這入り、新発想法が加はつてゐる事は事実である。作者の境遇が或点まで見える。作者は大抵批評的になつて来てゐる。遊んでゐる階級であるからである。物語系の抄物にも批評的な態度が出てゐる。物語絵の系統のものを客意に於て話すものが便利で、第一位に置くべきものが、一種の教訓集と言ふ様なものになつて来る。

例へば江戸の文学の源になつて来るもの故に大事なものであるが、西行法師撰集抄、平康頼法師の宝物集、も少し時代が下つて、無住国師の沙石集、又室町幕府のはじめ頃、或隠者の作つた十訓抄等と言ふものは、僧侶の手になつたもので、皆国文的に過ぎる程国文脈なものである（沙石集は別）。

此等は名をあらはしてゐる作者が作つたとは思はれない。鎌倉時代のものについては大抵言へる事である。後に次第に書き加へて行つたものと見てゐる。分量が次第に増し、前の本の形が気に入らぬから等いふて書き易へておいて名前は前者のをそのまゝにしてゐる。まだ〳〵かゝる書物は出て来る。

この事は普通に話すと平安朝にあつた。今昔物語、或はその一つ先の三宝絵詞等といふものゝ流れだと直ぐに考へられるが、事実は単に其だけではなく、仏教類話集が撰集抄以下の元になると理想がはつきりしてゐる。同時に歌ふものと言ふ要素が、這入つてゐる様に思はれる。文章が違つてゐる。目指してゐる理想的の生活が違ふのである。まだはつきりする言葉が見当たらぬが、著しく教訓が、深くなつて来る。其教訓が次第に近世風の因果応報と言ふ考へに陥込んで行く傾向を見せてゐる。

室町の末から徳川にかけての近世文学から因果物語、因果応報を抜いて了へば、何もなくなるのであるが、其の匂ひが時代を経るにつれて深くなつて来てゐる。

抄物に於ける逸話集　かうした風の抄物は、語られたものと考へてゐる。形から考へると一種の逸話集で、然様いふ意味を持つたものである。

ところが、かゝる抄物の外にかたい抄物がある。この類の抄物は本当は絵はないのであらうが、話はやはり断片的な逸話である。仏語を漢訳したやうなもので、古事談、続古事談、愚管抄等で、仏教式抄物の形を具

へた逸話集で、皮肉な批評をしてゐる。そして割合に仏教の事を説いてゐない。本当の抄物は物語と違ふ。物語は人をひきつれて行くところがあつたが抄物はもと〳〵抄き書きで、貼り付けて行くのであるから別である。そして僧侶が書き乍ら、寺家風の教訓は割合に少ない。

抄物の中には前述のごとく二つの流れがある訣である。固い方は学者階級の方に読まれ、仮名の方は、歌はれて絵解きの材料に使はれたものと信じてゐる。ところが抄物の中に特殊なものが出て来てゐる。これは寺家の文学（鎌倉室町を通じて漢文学が栄えてゐる。江戸になつてから儒学と文学が妥協して栄えてゐる。文学の方は軟文学になつた。つまり本当に熾んであつたのは、五山文学で帰化僧又は其の弟子等の伝へてゐた文学であつた。日本の文学は奈良朝に栄えて、それが、ちよび〳〵続いてゐたが、鎌倉室町に栄えた）で、其の僧の間に経典の注釈の外に詩文の抄き書きが出て来る（一）。これは室町から徳川に続いて江戸になると句帳といふやうな形に変つて来てゐる。其の形を坊さん等がとつた。又これに対抗した陰陽道の呪禁師が、俄かに神代から伝つてゐる秘法をやかましく云ひ出した。そこに寺方の方の新医療法が日本に入つて来、その書物の形が、句帳と同じ形をとつて来る（二）。何の病には何薬がよいと言ふ事をあちこちから抄したものである。この句帳の形をとつた二つのものは共に寺から出た事であつて、江戸の芝居評判記の形の源流、菎蒻本（洒落本）の源流である。（洒落本は横本仕立てのものを、縦にしたものである。日本の文学――江戸頃の――は本の装幀と文学の内容とが一致してゐる。）

芝居評判記のもとは少くとも室町時代の僧の詩文の抄き書きなる句帳、医者の覚え書なる医方からで、抄物の一つ系統であつた。句帳医方は少しも文学的でないが、江戸の評判記になつて飛躍してゐる。

句帳の形は同じ抄物とは言ひ乍ら、巻物を使はなかつた。鎌倉時代からは巻物の勢力は袋草紙に移つてゐる。で帳□に貼り付ける事となり、或は帳面に抄き書きするやうになる。前述の絵詞の系統と思はれる抄物、宝物集、撰集抄等は、語られたらうと言ふたが、同類のもので語られたものは、沢山あつた。絵の側に文句が

ついてゐるのを読み上げる。文字がついてゐないと有難くないので、字つきの棒を持つて来る。昔は口で語つたに違ひないが、口頭の文章の時代は決して絶えたのではない。口頭の文学は卑しいと考へられた時代が其の傍らにあつた。其が鎌倉・室町の時代に強くなり、江戸に這入つてゆく。

絵解きはお経と同様に巻物を広げ、字つきの棒で字をさして読み上げる。それを商売にしてゐるのである。路傍で行ふた。江戸時代になると其が懸物になり、其の説明の文句は、暗誦せられて本当の口頭文学となり、卑しい文学となつた。その文学に対する待遇が低くなつて来たのである。

然様にして口頭の文学と文字の文学が交錯して行く。その考へを一方日録体の抄物の方に移して行く。先づ第一に問題になるのが東鑑で、之は都鏡と対立した書名で、権力階級の人に対する一種の処世訓となる先蹤集であつた。それをかゞみと云ふ。京の都の時代の末から鎌倉のはじめにかけて、盛んに行はれたものである。それを東でもやらうと誇つてやつたものである。それは実のところ本当の鎌倉幕府の日記でなく、抄物といふ事に這入るところを集めて来たもので、東鑑はその編纂物である事は八代さんが既に言ふてゐる。見ると、大分後に諸家の材料を集めて作つた歴史的抄物に違ひない。日記がその土台であらうが。先蹤集的の歴史である。それで本当の日記ではない。従つて嘘がある。伝説の領分になると、東鑑はもろいのである。曽我兄弟の事等は、後になつて出来た事である。伝説を作る力は誰も無いが、昔から類型のものが興ると、その類型の伝説になつてずつと変つて行く。虎御前の事等は全く嘘であると思ふ。伝説の学問の上から信じられない。東鑑が抄物であると云ふことは、そんな事からも段々言へる。

現実の歴史だと思ふてゐるに関はらず、歴史と物語とが平安朝の頃に既にあやふくなつてゐる。東鑑が歴史だからと言ふたところで、作物風の物語である事を免れなかつたのである。歴史と伝説の区別が立たなかつた。幕府の日録だと思ふてゐるものでも、抄物はある。探つて見ると、この系統の書物が大分出て来ると思ふ。この系統のものが又語られてゐる。漢文で書いたものであるが、不思議な事実が行はれてゐる。

口頭文学の再現

室町時代から江戸時代にかけての武家の文学の特質、口頭文学についての話をする。

日本の文学が口頭を離れたのは、平安朝に這入つてからの事である。かういふ言ひ方からすれば、記録せられた文学は古くからある。然し平安朝の特質は、口頭のものは文学ではないと見てゐる。ある貴族階級の保護を受けてゐた女房たちの文学であり、或は一転して隠者の文学であつた。それが武家時代になると、口頭の文学が現はれて文字の文学と関係を複雑にして行つた。私はそれ等を文学と芸能とに分ける。それまで低いところにあつたもので、平安朝に高いところに登つたのが、武家の時代になると地位が顛倒して低いものが、高くなつて来た。つまり作者が乏しくなつて来てゐるのである。隠者の身分は低い。それで高い階級の文学に似せて文学を作つてゐるが、それはやはり低いところに根ざしてゐる。隠者階級は殿上人、地下人、或は武士・僧侶の階級を含んでゐるが、も一つ口頭の文学を平安朝の末から盛んに導いて来たものがある。それは寺の配下の奴隷である。奴隷の有してゐる芸能が純粋の文学と言ふものと同一の水平線に達する程になつて来た。我々は平安朝は穏やかだと言ふてゐるが、七十年は廃退した時代である。その頃が廃退味の盛んな時である。

従来の宮廷の文学芸術では満足出来ないで、低い階級の芸能に興味をもち、自分等の文学芸術の中に取り込んで来た。低い階級の為に舞の手をつけてやると言ふた様な人が出て来る。信西（通憲）等はその代表的な人で、白拍子を保護した人である。白拍子はこの人がはじめたのだとも伝へられてゐる。

平家物語は信濃の前司が作りそれを生仏と言ふ盲人に語らせたと言ふことになつてゐるが、行長が何処まで作つたか問題である。信西の娘が物語の中に数人参加してゐる。か様に低い文学に同情してゐる許りでなく、これを助けてゆくやうになつて来た。それでこの関係は密接である。

貴族の文学芸術・平民の文学芸術と言ふてゐるが、閑吟集といふ様なものを見ると高いものも低いものも一緒である。芸能を扱ふ低い階級は無論、高い階級のものもさうなるのである。それを隠者階級の人が書き留

めておいたものと見られる。これは武家、これは貴族と目安が立たなくなつてゐる。奴隷階級の文学芸術（口頭の文学）が盛んになつて、それが平安朝の末からさかんになつて来た。これは世の中の宗教現実である。手とり早く言へば、これまでの平安な社会生活が、壊れやうとする世の中の有様で、武家の階級に実権が移る橋渡しとして平安に移つて行き、世の中に不安な空気が動いてゐる。さういう訣で、宗教的な運動が、ひんぴんとして起つて来る。簡単に言へば、奴隷階級が開放されて来た、又は宗教方面に逃げて行つたと言へよう。然しこれは上流階級が、世の有様から陰鬱なものを感じ怖れを抱いてゐたのである。下流階級でもある階級の解放を慾してゐるところから或る種の雰囲気を醸成し、そこから宗教運動が起つて来た。

奴隷がも少し自由に動き、ものを言はうとするには、宗教に這入らなければならぬ。そこで従来、社会の下を通つてゐたと見える（本当はもつと記録がありさへすれば結論も変るであらうが、）ものが世間の心にぴつたり合つて宗教運動を起した。故に、宗教的自覚をもつてせられたものではなかつた。

念仏宗（時宗）融通念仏宗などは、本当の宗教ではなくして一種の芸能であつた。それを宗教化したものであつた。平安朝末の宗教は、まだ宗教の衣をつけてゐなかつた。それが次第に宗教になつたのである。さう見なければいけない。

奴隷階級の解放　一方見ると平安貴族の末から武家のはじめは奴隷開放の時代であつた。そこへ新しい武家が出来て来た。それは京都の公卿と違つて地方に流れて行つて、貴族の様な生活をして行つたものである。社会の階級は沢山ないから、その社会では主人と家来の関係が密接である。家の子郎党に同じである。家の子は一族、郎党は家来である。しかも家の子は一族でも郎党に等しいもので、主人に対しては二つの階級がない。次第に部下の地位を認めて高めて来る。従つて部下の者は成り上がる。しかしもとは貴族と奴隷の関係にあつた。然し都の武士（六衛府、北面、瀧口）は皆武官の名はあるが、新興の武士とは別である。これは日本の国家が、宗教で国家を作つてゐた時代からのもので、一種の公家である。それが平安朝の末頃から東あたりから、公家出であると自称して出て来る。こ

の者の為におびやかされてゐた。

実のところ、貴族を上に戴いてゐるが、その下には奴隷として仕へてゐたものが地方に並んでゐた。奴隷階級が武家時代のはじまりに於て既に解放の日を見てゐる。その時残つたものが、今日まで名をかへ、形を変へて残つて来たのである。

然様に陰鬱な宗教時代であるが、奴隷開放の時代であるから、さうした時代に芸術が盛んになるのは、当前である。低い階級が、面目を新たにする時代であるからである。この奴隷階級の文学が、すべて宗教的の色合ひを持つてゐる。

我々の国では平安朝の長い間文学を維持する階級と言ふものが、二通りあつた。文学を維持する階級について考へねばならぬが、あまり変化させずにじつとこたへて行く階級がある。平安朝では貴族階級は貴族文学をもつてゐるが、低い奴隷の芸能は寺にあつたのであつた。保護者は別として寺が維持してゐた。形を変へないでずつと維持する不思議なものがある。それが平安朝の末から鎌倉時代にかけて日の目を見て表に出て来た。

浄瑠璃系統の文学　この寺の文学の中で一番先にわれ〳〵が見なければならないのは、浄瑠璃系統の文学である。つまり浄瑠璃と言ふものが、江戸まで続いてゐるが、浄瑠璃の内容も変化してゐる。この系図を申さなければならない。

それには新しい文章の出発について話す必要がある。鎌倉時代の文学の特質は、文章が変つて、従来のやうな女性の国文脉でもなく、と言ふて男性の文章が出来てゐる訣でもない。中には漢文脈のものもある。漢文で書いて返り点で日本語を表はすものもあるが、文学の畑に這入つて来る。その時、女房文学と其の文脈に新しい語を織り込んだものと言へる。そして其処に新しい発想が生れて来た。女房風の表現では言へない生活があつた。文脈は女房文学風であるが、詞が変る。従つて調和が欠ける。そこに新しい姿が見える。この変つた風のものを今まで軍記物といふ。ところがも一つの抄物と二つの然様な風にして新発想法の文学が出来た訣である。しかも、其の詞に抄物と言ふものは、次第に高い位置になつて来る傾向が出来て、高い位置のものに読まれて軍記物は低い地位のものに歌はれ弾

かれるやうになつた。それで抄物の方がいくらか学問的であつたが、もとは同じ事である。さう進んで来た抄物の事は前述した。

台本　日本の新しい武家の時代に起つて来た浄瑠璃系統の口頭の文学は大抵軍記物といふ土台をもつてゐる。も一つつけ加へて置かねばならない事は、台本は出来ても口で語られると言ふ事である。台本は語る人の為であつて、まづ読むものではなかつた。それが次第に読むものであるやうになつて来た。即ち平安朝の物語と同じ経路に戻つて来た。

口頭の文学が宗教味を帯びて来た。それが浄瑠璃である。軍記的な色合ひを持つてゐる事は不思議な事である。此処で平家物語を基礎にして話を進めて行かう。或る家庭の興りから亡びるまで、又は一族の歴史を書いてゐる。其処に陰鬱な空気を人に感じさせやうとする。華やかさもあるが、これは勿論出て来る経路は分る。一方武家の間では、前から自分の家の高名録を書いてゐるから、それが一族物語になるのである。それに対して、口頭に語るものとしては、今ある家よりなくなつた家のものを語る即ち歴史になつたものを語る方がよいのである。それに宗教的の解釈が加はつてゐるのである。宗教的のある理想を現はす為に書いたのではなくして、事実について宗教的の解釈を不知の間に加へて行くのである。で始終、無常を説かうとしてゐるものではない。生者必滅の理を言はうと言ふのでもない。例へば日本の文学は大抵室町辺のものは、おそろしく陰鬱である。平家物語等はまだ華やかである。義経記・曽我物語等は、浮ぶ瀬がない。苦心してよい事をしてゐ乍ら哀れな最期である。自然な様になるのである。かういふ生活を書かねば浄瑠璃らしくない様に取材が定つて陰鬱になる。それが宗教味を加へて愈々陰鬱になる。浄瑠璃のはじめは説経である。説経は寺で琵琶を伴奏楽器として、うたはれた経で、遂に一種の声楽になつて了つた。

説経・浄瑠璃、男の芸・女の芸　平家物語もはじめは扇拍子で語つたと言ふ伝説がある。私は疑ふてゐる。日本の説経は寺にあつてさへ琵琶がある。平家物語をはじめ扇拍子で語り、後に琵琶にしたとは考へられない。初めから琵琶を用ゐたと思ふ。その説経が進む間に浄瑠璃が出来て来る。浄瑠璃の方が都合がいゝから

説経より浄瑠璃と言ふことにする。

文学史的、音楽史的に言ふと説経の柔らいだものが、浄瑠璃である。日本の芸術は都合のよい事に男の芸と女の芸とは違つてゐる。説経は男の芸、浄瑠璃は女の芸である。盲僧が説経をやり、瞽女が浄瑠璃を行ふ。同じ夫婦でも、するものが違ふ。果して、説経浄瑠璃が盲人の間許りに行はれてゐたかどうかは疑問であるが、数の上から言ふて、盲人が多いから盲人の芸だと言うてよい位になつてゐる。

平家物語の様な軍記物を説経だと言ふと変な様であるが、その語る方法は、やはり説経である。つまり説経の中に一分化としてあの様な盛んな芸術が生れて来たのである。その間に琵琶の伴奏によらぬ説経が出て来る。説経とは言へないものである。それが扇拍子で語るものである。すると声楽の要素が減つて来る。盛衰記の違ふ点はそこにある。

平家物語と盛衰記とは少しの違ひを除けば、同じものである。違つた名前で、同じものがある。太平記の名になるまで、三度まで変つた。私の考へは今では、平家と盛衰記とはそんなに違ふものではないと言はれてゐるが、然し盛衰記は、扇拍子位で口で語つたものと思ふ。平家は琵琶である。さう私は考へてゐる。

口で語るところの説経から出た軍記が又だん〳〵栄えて本当の軍記戦記と称すべきものが、其処から出て来る。然し一面から見れば、曽我物語、義経記はやはり軍記で一族の歴史ではないが、一族の中の傑出した人又は飛び離れた事件の主人公を書いてゐるものである。説経・浄瑠璃は、出発は軍記にあるから軍記脈で書いてゐる。曽我物語や義経記を見ると之は女の語るものである。ことに曽我物語は瞽女の語つた文学である。義経記は中ぶらりで、女も語つたが、男も語ると云つたやうなものである。で、義経記にもも一つ軟らかい女語りのものが出て来る。十二段草子である。かうして説経と浄瑠璃とが男性と女性との専門に分れた口頭の文学として発生して行つて、江戸の古浄瑠璃に続き、近松が出た辺に非常な飛躍をした。

この説経浄瑠璃と言はれる（武家時代を通じて言ふことの出来る）一番大きい口頭の文学は、一家族の高名録を奴隷階級に伝つてゐる音楽で語つたもの、と云ふ風に見て行けば、まづ輪郭だけは現はす事が出来ると

思ふ。

口頭文学の特殊相　日本の口頭の文学から出たものゝ特殊な姿について言はなければならない事は、平家について言へば、平家は寄せ集めで、語つてゐる中に、書き増されて来た。義経記、曽我物語も然様である。かうして書き加へて行くもの、他方に書き変へて行くものがある。この二つが一つになつて了つて次第に大きくなつて来る。かゝる事は平安朝の物語にも度々ある。例へば源氏物語は然様にして発達して来た。一方に枝が出ると同時に書き変へがあつたのである。筆の上の文学でも、口頭の文学に於ても、この点何時も同じで、その習慣が記録の文学の上にまで及んでゐる。語りの数を増し、語りかへて行く事によつて源氏等も出来て来たのであらうが、それが口頭の文学が栄えて来た武家の時代になると、大ぴらに行はれてゐる。平家物語、盛衰記は幾度も〳〵書き継がれて来た。これ等二書の異本を見ると、すつかり違ふのがある。これは書きかへをした為である。曽我物語、義経記でも然様である。口の上でやつてゐる時は変化が少ない。口の上では古いのが保存される事なく、新曲が出て来るのが、口の上の習慣である。それが記録になると大きくなつて来る。それは語つてゐる間に記録せられ、その記録が次第に殖ゑて来る。その間には廃曲もあるが、とにかく口頭で語る許りでは亡びるが、語り乍ら記録して行くのである。最初の中は語つたものに後から記録を加へて行つたのが、大きくなつたのである。が、後には語る為の台本として記録する。かうした原因結果が交錯して来てゐる。その原因はよく判らぬが、書き直す理由は分る。即ち、語つてゐる中にこれではこの地方の人に分らない。この階級の人に分らないと思ふと、語り乍ら改作して行く。それが度重なるとすつかり変つたものになつて了ふ。我々が考へると不思議に思はれるが、盲人は感が強いが一度語りかへると又語りかへ乍ら語るので、変化して行くのである。この事は近世まである。「鉢の木」の文句を謡ひかへて褒美を貰つたと言ふ話もある。即興が働くと言ふ事が、浄瑠璃の文句の変つて行く原動力である。階級の理解に訴へて変るのである。それを改めて台本に取る人があれば非常に変つて来る訣である。

口頭文章の融通性　日本の口頭の文学は、何も律文

にしなくつてもよいのである。何でも語る事がある。浪花節は講談でも新聞でも語る。本当に節が定つてゐない。歌ふ台本に出て来る文章が、律文的でなければならないと言ふ事はないのである。語る物であるから自然律文的になるが、曽我物語、義経記、幸若の舞の本などを見てもこんなものが語られたのかと思はれる。御伽草紙を見ても驚く。そんなものでも声楽的の台本に出来た。それで台本に混乱が起つて来る。

我々の間で始終問題となるのは、幸若舞と御伽草紙との関係で、御伽草紙の文句であつたものが、幸若に這入つて居り、幸若のものが能に入つて居り、田楽猿楽の文句におそらくひとつであつたらうと思はれるのがある。それは他の派のものを歌ひ語ることは自由であつたので、律文でなくても、何でもい、のであつた。で口頭文章として語り歌はれたものと信じられぬもので、語られたものがある。又この流れのものが存外よそからの借り物であつたことがある。かう見て来ると我々の国の文学は何であつたらうと思ふ。然し室町は前期の武家と後期の武家との橋渡しの時分になつてゐる。でこの間の文学は、すべて次の時代の文学の肥料みたいな文学である。文学そのものではない。文学の種でもない。肥料である。やかましく言へば文学ではないが、次の時代に発達するものであるから大事なものである。謡曲の文章なんか何でもない。佐々先生は、錦の切の継ぎ接ぎだと云はれた。そんなものに過ぎない。文学としての価値はない。謡を見てよいのは他の価値である。即ち文学史的の価値は大きなものがある。困つた事に日本人は、無意識の中に物を大きくする点はよいが、意識的に大きくする事は殆んどない。これは文学の上では確かである。予感で新しい時代に導いた人は一人もない。むちやくちやに打つかつて次の時代の文学が出来て来たのである。意識して文学運動をなし得た人はない。長い時代の力でそれがなされて来てゐる。

室町時代に播かれた種が、江戸になつて大いに延びねばならぬのに文学として許せるものは元禄で止まつてゐる。うぢみたいな文学は沢山出て来てゐる。その点文学史的に見れば面白い。だから江戸に於て前期武家時代（鎌倉――室町）に発生した種が、完全に発育したとは申されない。が小さい乍ら分裂して一寸見たと

ころ、違つた風のものが、次の時代に湧き出てゐる。ともかく室町から江戸へ通じての文学は見ておかなければならぬ。それは我々の国の文学の発達しきらぬ色々の姿が見えてゐる。面白いが、純文学としては失望しなければならぬ。

口頭文学の話はこれで了つておくが、前述したもの、書きかへと言ふことは、浄瑠璃がどこまで盛んになつても行はれてゐる。近松のあたりでも然様で、以後はむろんさうであつた。一寸趣向を易へて行くのは易いのである。粉本を易へて行くのである。それがあらゆる江戸文学にある。読本にしても、その前の浮世草子にしても、後の合巻にしても、みんな新しい種はなくして古い種をかきかへてゐる。どんなに上手に書きかへが行はれたかと言ふ事が江戸の作者等の自慢であつた。文学者としては恥なのであるが、それは昔から伝つてゐる日本の文学の型、記述法であつたのである。ともかくそれが段々おして長く続いたが、明治になつて、文学の素質が代つた。西洋文学に感謝しなければならない。

歴史的に見るものは、何でもかんでも面白いと言ふ風である。同情が薄くては文学史の研究は出来ない。で出来るだけ沢山読んでおかねばならぬ。読んでおく事は同情の薄い行為ではないのであるから。

文学史をする以上、自然しびれて来るのである。しかも文学的観賞を施せるだけの余裕は常に保つて行かねばならぬ。さうして行かなければ、日本の文学史は大きくならないのである。

六月廿一日

興行団体

口頭文学の概念は話したつもりだ。それと関係した興行団体の動きに就いて考へてみたい。

広い意味の芸術を興行して行く団体は、我々が想像も出来ない昔から廻つて歩いてゐたに違ひない。しかもそれが割合に変らない形式で、幾度も〳〵同形式をかへずに内容も同じであつた。たゞ人々が違うてゐた。興行団体が日本の国土を歩いてゐた事が見られる。

くゞつとほかひゞとゝ

私の考へでは海を中心とした種族（一）と山を中心とした種族（二）と二つあつて、神を持つて歩き、その神の信仰を宣伝して歩いた。それが同時に生計を営む道になつた。□のもの

が一ケ処に定住する事がなかつたが、近世になつては、ある地に定住してゐて、そこから出かけて行くやうになつた。異神をもつて布教して歩く。その時に芸能が伴つて行くのである。布教して歩くと自然そこに芸能が行はれて行く。芸能といふものが宗教的作法であつて、それが自然芸能の中に這入つて行く。海を主とする団体は普通所謂傀儡師と云ふ名にこめてゐる。山を主としてゐるものは、乞食者（ホカイビト）としてゐる。この二通りの区別のあつた事は疑へないが、属すべきところが混同してゐるものはある。或時はほかひびともくゞつと言はれてゐた時もあり、事実一緒になつてゐる事もある。団体の人自身には、変化はなくても、見る人は同じである。海岸から街道筋に上つて行く。するとこのくゞつは、それまでのほかひ人と区別がつかなくなる。さうするとほかひと称せられなくなつた後も同じ様に称せられた。

巡遊職人のもつ神　くゞつ、ほかひ人は作法を同じくしてゐた。自分等が持つてゐる神と、地方〳〵を守つてゐるところの大きな霊物と、その地方の精霊と三つある。自分等の持つ神は土地の神又はその土地にも居つたもの或は精霊の集つてゐる頭だと言ふ訣で、ことほぎをして歩いた。それはくゞつもほかひの仕事も同じである。

くゞつに似たものに例をとつてみると、八幡神の信仰は、海部の民によつて布教せられて来た。ところがその海人部の民が、布教して歩いたものは、自分等の神として以前より持つてゐた巨人である。それは普通武内宿祢と言ふてゐる神で、久留米の東方にある高良明神であると言ふ。平安朝の中頃に、それははつきり出てゐるが、武内宿祢かどうかはわからない。とにかく巨人である。この神に我々の神も圧迫せられたのだからお前達（精霊に）も服従しなければならないと言ふやうになつた。それが伝説化して了つて巨人（オホビト）の話――関東では大太郎法師、平家物語の姥ヶ岳の話では大太童――となつてゐる。

大多良男命・大多良女命の名が大太童である。この神が海人部の仕へてゐた神である。つまり海人部は八幡神の信仰と共にこんなものを持つて来たのである。奴隷はかく征服者の神と自分等が祖先から持つてゐた神と二つ持つてゐるのである。従つて神社の神を宣伝す

ると同時にある時は自分自身の信仰を宣伝する。くゞつのやうなものが、かうして街道を歩いてゐた。ほかひ人も同様に山の信仰をもつて歩いた。平安朝では京都附近の社、宮廷にはやまびとが来て事があれば、ことほぎをなし、祓へをして行つた。

くゞつ、ほかひ人が水辺と陸地を歩いてゐると言ふ事になる。

その中、ほかひびとの名が聞えなくなつた。くゞつと言ふ詞の方が人気がよかつた。平安朝末から鎌倉にかけて傀儡記などの書かれたのを見ても、興味を引かれてゐた事がわかる。傀儡師は必ずしも水辺に限らず山にもあつた。我々が今まで考へてゐたのは大抵くゞつと言ふ団体であつた。

くゞつのはじめは水辺の港か、川口に根拠を占めてゐた。それから街道に出て、開墾されてゐない地に自分等の場所を定める。今まであつた宿場（駅）のところにはゐないが、又別に新しい宿を作つた。それが次第に栄えて来て、町が繁盛する。その宿の頭を長者又は長と言ふた。後に、長、長者の意味が変つてゐるが、昔の言語で言ふと刀祢と言ふものである。刀祢の女性は刀自である。宗教的に言ふと長老と言ふ事である。山の刀祢は山伏である。刀祢、刀自の翻訳である。本当は山賊ではないのである。

くゞつ・ほかひびとの団体組織は女が頭であつた。神に仕へるのが女であつた。神に仕へる事として人形を持つて舞はして歌を歌ふ。そして次第にくゞつの中に芸能が発達して来た。

くゞつにもほかひびとにも這入らぬ都辺の古くからゐる寺宮の奴隷は、宮寺のぱとろんに愛せられて行く。そしてその人等の好む芸能をする。平安朝の芸能はさういふ所に出来たとするのが、本筋である。さうして流民の間にその芸術が流れて行く。それによつてくゞつの芸能が、多種多様になつた。くゞつが今様を歌うたりしたのは宮寺での芸が、くゞつに移つて来てからの事で、やがて、それがくゞつの本芸の様になつた。さういふいろんな団体、奴隷、くゞつ、ほかひ等の事を、平安朝の末から鎌倉のはじめに考へると奴隷は村をもつてゐるが、ほかひびと、くゞつは生活力が殆んど似て来て、或るものは定住して宿をひらき、又船着場所に町を作つたりするが、或者は本当に漂流して行

く。さうして定住の形をとつて来るが、しまひまで定住せぬものもあつた。その末は判らないが、今のところ山窩がさうであると言ふ。柳田先生の話では辻君の事はもと惣嫁というてゐた。それからであらうと仰つたがそれは分らない。それは分らない事であるが、さういふものについては、何か変な神を持つてゐるとだけは言へる。山窩はこの点も分らない。この群に這入つたら出られないと言ふ事である。

今でも人形を持つてゐる村はあちこちに沢山ある。街道筋のある村のは普通の人間になつて行つてゐて分らないが、海岸等に少し残つてゐるのは、えびすかきと云ふやうなものになつてゐる。末は然様な風になつたと思はれる。

今考へなければならない事は、くゞつ、ほかひゞと及び宮寺の奴隷の三種の芸能の団体が鎌倉・室町にかけてどういふ風に動いて行つたかの概略に就いてである。

祝言職人の種々相　例へば田楽でも猿楽でも（鎌倉に栄へて室町に一時衰へ、足利義政時代に至つて又興隆して来た）まづ疑ひなく奴隷の村からである。それが定住してゐる。それにも関らず時が来ると、初春田植ゑ等には諸国を廻つて歩く。観阿弥・世阿弥は諸国を廻つて歩いてゐる。さうかと思ふと一つの宮寺だけでなく、ぱとろんや得意先が殖ゑて来る。それから遠いところまでやつて行く。それは自分等のもつてゐる宮寺の信仰によるものである。高野聖は高野山の信仰をもつてゐると同時に、自分等の念仏を持つて歩くのである。かうして祝福して歩いて、村に帰つて来る団体がある。或は祝福して歩くが、同時に商売をして歩くものもある。それには歴史があるが、自分等の村のものを持つて行つて交換して歩く。高野聖などが旅行商人の初め位であらう。

高野聖　すり、すつぱ　高野聖は怖ろしいものであつた。後のもので真偽の程は分らぬが、ごまのはへと称するものは高野聖の生活法を真似たと言ふ。旅行するのに一番便利なのは、宗教を持つ事であつた。故に宗教に関係のないものでも、その法をまねて行く。新しい土地を見つけて歩く。或は道々の小豪族を抑へて行く。高野聖は、泥棒とまるで同じである。日の暮れ方になると宿からう〳〵と言ふて来たのが怖れられ、

その印象が残つて後には化物のやうに考へられてゐた。

高野聖に宿かすな
娘とられて腹立つな

高野聖の如何なるものかを語つてゐる。それ等のものが団体をなして行くのである。

高野聖の中に、本当の高野聖（一）とにせのものと（二）本当の高野聖であり乍らにせもの、生活態度を真似て行くもの（三）と三種ある。それ等の運動の具体的になつて行つたのが、室町頃のすり、らつぱ等いふもの、類である。すりと云ふのは本来は旅行の道具であつた。団体を組んで行く事もあつたが、又単独行動をとつてゐるものもあつた。

大体室町時代に出来た狂言を見るとすり、すつぱ、らつぱが出て来る。大抵独立して歩いてゐる。都に居つて常習的にしてゐるので。地方では団体の風であつた。人をだまし、おどしして奪つて行くのである。そんな輩が組織立つて来ると、旅行して歩いて地方をおびやかして行く。それが戦国時代の傭兵となるのである。だから蜂須賀小六の話もある訳で、もとは皆同様なものであつたらう。それがなり上つて行くと素性を隠し、塗り消して了ふ。秀吉にも、この事は言へる。徳川氏にして見たところで、上州の念仏聖の親子が二人、三河の山奥に這入り、子が山向ふの本田の養子となり、更に松平家に養はれてゐたものである。戦国時代に名を挙げて来たものは皆こんなもので独り蜂須賀に限つた事ではなかつた。そのやうな生活をしてゐても芸術は失はずに持つてゐた。

すり、すつぱ、らつぱ、しよろり等と言ふのは皆同じ種類の名であつた。昔の泥棒は大びらであつた。その手に負へない奴といふ意味での泥棒が芸能をもつてゐる。それが次第に歌舞伎芝居を生んで来た。ひつくるめて歌舞妓者といへばよいのである。室町の末から次第に盛んになつて江戸で抑へられてなくなつた旗本奴は、ごろつきであり乍ら芸能をしない方のもので、町奴は町に定住したのである。これがひとつの流れである。

ところが更に時を定めて出て来る連中と不定で出て来る連中とがある。昔の言葉で言ふと、空閑（ゲン）の土地を求めて、根拠を据ゑるのである。虚無僧等と言ふものは

乞食であつた。それでも芸能をもつてゐたのである。歌舞妓者の一流である。ぼうと云ふてゐる。歌舞妓者にもいろんな流派がある。定期のものがある。田楽猿楽の連中で、初春・田植ゑの頃あつた。人形を持つてゐるものは大抵定期のものである。えびす神はよく分らぬが遠いところから来る神に違ひない。普通の神ではない。蕃神でいゝのである。それは時期を定めるので義意（ママ）がある。時期を定めて来るので旦那場の定つたところに出かけて行く。みな芸人で下つてゐる。あげてゆくときりがない。だが定期と臨時に国を廻る事だけは考へなければならぬ。その外に定住してゐるか否かも考へなければならない。定住してゐない連中の方が早く出来、次第に発達して行つた。その最後の打ち止めが歌舞伎芝居である。

歌舞妓の変遷とその本芸と　歌舞妓芝居は女が歌舞妓者のまねをしたところに始まり、男の事を問題にしてない。当たり前に男の歌舞伎があつて、それを女がしだし、女歌舞妓が禁ぜられるに及んで若衆がやつたが再び禁にあつて、前髪を落して野郎歌舞伎となつた。歌舞伎者の芸と言ふのは、人中を練つて行くのと早歌――後に唱歌（セウガ）を歌ふ事であつた。この歌舞伎風の一番持ちこたへられてゐるのが、幸若で幸若舞の中にあつた。歌舞伎が幸若舞を必ずしてやつたとは言へぬが、代表的のものであつた。幸若の役者は田楽や猿楽や能と違つて［　　］である。その幸若が浮浪してゐる間に若いものがもてはやされる。そこに若衆のはじめがある。こんな者の生活と芸術は同じである。生活を舞台で実演してゐる。歌舞伎はその生活を芸術としてやつたのである。この幸若の演芸の中心は、祭りの行事から出て来てゐる。そしてそれが幸若の芸の基礎になつて来てゐる。それで諸国を押して歩いた。一つは祇園の信仰からであつた。

祇園の信仰　祇園の信仰は新しく盛んになつた。其は平安朝に御霊を抑へる為に、祇園が栄え、それから夏の神楽が栄えて（京の祇園、尾張の津島祭）室町になつてはその囃などが人気を得て諸国を巡つて歩いた。戦国時代の風流、異風行列は、祇園の祭りの風を真似たのである。

祇園の祭りは、田楽猿楽等もあつたのであるが、室町

から徳川にかけては、幸若風になつて来たのである。幸若もそこから出て来たものと思はれるのである。幸若の系図といふものがあるが、あれは後になつてよくしたもので、はじめはいゝ加減なものであつた。（以上一学年分は青池君のうとによる）